

# 住環境と子どもの問題

## - 「21 世紀出生児縦断調査」によるパネル分析 -

藤澤美恵子

金沢大学人間社会研究域

増田 幹人

駒澤大学経済学部

### 要旨

次世代を担う子ども達の成育は、単に親ばかりでなく国や産業界も注目しているところである。先行研究の成果から、住環境は子どもの成育に影響があると確認されている。しかしながら、先行研究はある特定の地域を対象としており、限られたサンプルでの分析であることから、研究成果が一般的であるか否かの疑義が残る。

本研究では、厚生労働省の「21 世紀出生児縦断調査」のデータを用いて、住環境と子どもの成育の関係についてパネルデータ分析をおこなう。具体的には、人口密度・住宅の形式・所在階数の住環境が子どもの外遊び傾向・罹患数に与える影響、ならびに親に与える影響などについて分析する。分析ではまず、Breusch-Pagan のラグランジュ乗数検定をおこない、個別効果が有意に検出されるかどうかを検証した。その結果、個別効果無しの帰無仮説は棄却された。次にハウスマン検定により固定効果モデルを採択した。

固定効果モデルから、所在階数と外遊びの傾向の因果関係は統計的に有意に採択されなかった。先行研究によれば所在階の低い戸建てでは、外遊び傾向が見られるはずであるが、有意になっていない。なお、よりマクロな住環境として投入している人口密度は、固定効果モデルで 5%有意で採択されている。しかし、回帰係数は、大きくなくプラスの符号であることから、都会の子どもの方が若干外遊び傾向があることがわかった。同様に、罹患数に対する所在階は有意に採択されていない。むしろ負の関係があることから、先行研究とは逆に所在階が高くなればなるほど、罹患数が減少する可能性がある。一方、戸建ては集合住宅よりも罹患数を減少させることが明らかになった。

住環境と親の子育ての喜びの因果関係では、マクロ的環境である人口密度は採択されなかった反面、戸建て住宅での子育ての喜びが高いことがわかった。空間的な余裕や階下を気にせずに子育てできることが反映されているかもしれないが親の心情であり、子どもの育成に関してはあくまでも間接的影響にとどまる。

以上のことを踏まえると、先行研究で確認されているほど、住環境は子どもに対してあまり強い影響力を持つわけではなく、親の状態や家族の状態などに左右される可能性の方が大きいことが示された。

キーワード：外遊び傾向、罹患数、親の子育ての喜び、住宅の形式、所在階数